「生誕 100 年　清宮質文」の楽しみ方をいろんな人に聞く「清宮質文」の歩き方 ④

今回は小説家絲山秋子さん×清宮作品コレクター新井昭彦さんクロストークです。

《夢の中へ》

「左が前回 2004 年清宮展のチケット、右が今回のもの。左の作品が清宮作品初コレクションでした。可愛いと思ったのですが、実は悲しい絵だった。可愛がっていた通い猫がこの姿勢のまま亡くなっていて、それで昇天させてあげた。」（新井さん）

「そんな悲しい絵だったんですか？20 代でどうしてそんな悲しい絵を？」（絲山さん）

「最初は知らなかったのですが、今思えばそれからずっと寂しそうな絵を集めてますね…」（新井さん）

《葦》　　《むかしのはなし》

「二つの絵の共通点お分かりですか？」（新井さん）　「…母子ですよね。」（絲山さん）

「そう、実は私幼いころ父を亡くしまして、母子家庭で育ちました。これは原風景です。

《むかしのはなし》をみていたとき、背景がどこまでも広がって…包まれる安心感がありました。」（新井さん）

「わかります！私も 2015 年の犬塚勉展で同じ経験をしましたから。背後まで絵が続いている感じ。」（絲山さん）

「それからこの親密感と。」（新井さん）　「お風呂で向かい合ってるようなね。」（絲山さん）

「《葦》もモーゼ出生が主題、作品集『暗い夕日』の主題も旧約聖書詩篇です。」

「クリスチャンではない清宮さんがなぜ聖書を？」（絲山さん）

「軍隊に入るとき『旧約聖書』と『万葉集』を持っていったそうです。」（新井さん）

「1 階に展示してある聖書？英語ですから敵の言葉のですよね？」（絲山さん）

《トンネルの出口（『暗い夕日』3）》

「聖書を持って行った学生は多かったそうですよ。この作品の別の摺りに英文で詩篇が書かれていて、私の《深夜の蠟燭》も清宮さんが額装したもので、英文が貼ってあります。仏壇にあったものです。」（新井さん）

「仏壇に聖書の言葉…。信仰でなければ、何に惹かれていたのでしょう？」（絲山さん）

「信仰でないにしろ、祈りを込めていたはずです。詩篇関連の作品を集めながらずっと考え続けています。母に育てられた私にも、同じ気持ちがあるのかもしれません。」（新井さん）

「それから月がろうそくに会いに来てますよね？どの絵も何かが何かに会いに来てる。」（絲山さん）

《深夜の蠟燭》

「公共性とおっしゃいましたが、独り占めにせず多くの人に見てもらいたいのはどうして？」（絲山さん）

「母が仕事で家にいませんので、子供の頃から近所の県立近代美術館で一人で絵をみて過ごしました。

その礎を作った井上房一郎さんを思うんです。私も誰かの役に立てれば。恩返しができればと。」（新井さん）

…これだけは持っていることを秘密にしたい、黙って墓場まで持っていきたいというのは、ない？（学芸員）

「一切ありません。」（新井さん）

「親友、駒井哲郎への告別だと思っています。欲しかったけれど買えなかった。」（新井さん）

「どうしてですか？」（絲山さん）

「ちょうど母が亡くなるタイミングでした。気持ちが入りすぎて辛くて…。」（新井さん）

《告別》

「詩篇の作品を意識しだしたのは《黒夜の鳥》を持ってから。偶然です。台座に英語が書いてあって、なんて書いてあるんだろう、どういう意味だろうと。「主よわが祈りをききたまえ、わが叫びのみ前にいたらんことを」という詩句でした。」（新井さん）

「こんなかわいい絵なのに、そんな痛切な言葉が？」（絲山さん）

「私のはやっと読めるほど黒くて、清宮さんの照れ隠しかもしれません。」（新井さん）

《黒夜の鳥》

「これは 1941 年だと、ちょうど開戦、同級生の繰り上げ卒業と合うのですが、それだとつじつまが合いすぎでしょうか。清宮さんは徴兵検査の関係もあり、卒業が翌年 3 月まで延長されました。友との別れを描いたのかなと。」（新井さん）

「悲しい絵なのですか？私は明るさを受け取りました。真逆ですね。」（絲山さん）

「最後の楽しい思い出とすると「1940 年」。どちらも考えられますね。」（新井さん）

《1940 年 12 月のある夜更》 **「きっと見る人で受け取り方が違っていいんですよね。」（絲山さん）**

《初秋の風》

《西の空》（ガラス絵）

「私の考える究極の作品は木版は《初秋の風》、ガラス絵は《西の空》です。この透明感や空の深さはほかの清宮作品にもちょっとない。空気とか風そのものですね。」（新井さん）

…作家さんたちが晩年の作品に自由や透明感を見る一方、子供たちが「悲しい」「つらそう」と。（学芸員）

「さっきの真逆じゃないですが、面白いですね。私も最初の部屋の蝶たちと、最後の部屋の蝶たちとが、同じ清宮さんの絵とは思えない。この違いは何なのでしょう？」（絲山さん）

「そうなんですよ、わからない。見れば見るほど、考えれば考えるほど、知れば知るほどわからなくなるのが清宮さんなんです！」（新井さん）

「きっとすぐにはわからないから、たくさんの人を惹きつけるんですね。」（絲山さん）

《夕べの空へ》（ガラス絵）